

chapter 1 裁判所から通知が来た！

これは、愛子さんの成長物語。

裁判員裁判がスタートして、刑事裁判が日常生活にとけこんでいきます。

裁判員に選ばれるのは、一年間で、三五〇〇人に一人と言われています。

愛子さんの住む町では、もっともっと高い確率で選ばれます。

皆さんも、愛子さんと共に学び、裁判員裁判に備えて下さい。

愛子「秋だねー」

毎週木曜日はカレーの日。

OLの昼は貴重。愛子は同僚のマキと幸子と三人、昼休みのチャイムと共に財布を片手に会社を飛び出した。

愛子「今日は断然カツカレー」

サチ「愛子また？ 今日じゃなくて、今日も

でしょ。わたしはチーズカレーかな」

マキ「わたしはカロリーをを考えて断然普通のカレー。二人ともいいわよねー。何でも気にせず食べられるから」

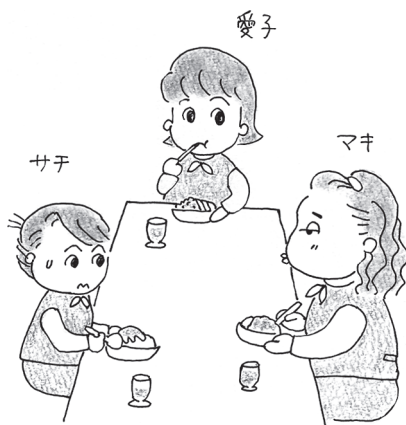
愛子「気にしてない訳じゃないんだけど…」

千円のランチ、決して安い金額ではない。

が、食べるが一番、恋が二番、仕事は圏外。

愛子は、そこそこ幸せな家庭に生まれ、そこそこ幸せな家庭に育ち、そして普通の大学を卒業し、ちよつとだけいい企業に就職した。

そこそこ大きな街で、特に暑いわけではなく、かといって寒いわけではなく、雨が降るわけではなく、雪が降るわけではなく、観光スポットがあるわけではなく、かといって特に不満もなく、日々を過ごしている。



ランチタイムの三人

えっ、わたしが裁判員？

愛子「普通が一番！」

マキ「…どうしたの？」

愛子「普通が一番だなーと思ってさ。

お金持ちって訳じゃないけど、すぐくすぐくイヤな人生って訳でもない。

このまま、何にもイヤなことにまき込まれることなく、普通に生きていけたらなー」

サチ「確かに、愛子って普通だよー」

ランチが終わったら、公園で雑談。

社内では、この雑談時間を愛子タイムと呼んでいる。

愛子「もう一時か…。戻らなきゃね」

Q 愛子「平和な時間はずっと続くよね？」

A 犯罪の発生件数は、一年間でざっと二〇〇万件。なんと、国民の六五人に一人の割合で、犯罪に遭っていることになります。けっこう多いですね。

* 愛子さん、平和な時間の大切さをかみしめなきゃダメですよ*

裁判員候補者名簿に載ってしまった愛子さん。

本人は忘れているようですが、いよいよ、裁判員を決めるための手続きが始まります。



1 呼出状ってどんなの？

長い梅雨が始まった。バスで通勤している愛子にとっては憂鬱な季節だ。

愛子のもとに裁判員候補者名簿へ搭載されたという通知が来てから、半年以上が経っていた。

もちろん、愛子は「裁判員候補者名簿」のことなんて、いつの間にか忘れていた。

その間の愛子の毎日は平凡そのもの。スリルといったら、お昼に隣のマキちゃんのお

弁当に手を伸ばす、その一瞬ぐらい。

そういえば、一つ事件があった。愛子がマキたちと行ったホテルのケーキバイキングでケーキを三八个食べて腹痛を起こし、病院に担ぎ込まれたのだ。

これはさすがに大事件だった。もちろん会社も休んだ。それ以来、課長には「おい、バイキング」と呼ばれてしまう愛子だった。

お母さん「おかえり、愛子。裁判所からラブレター来ているわよ。裁判官とも合コンしていたの？」

帰宅した愛子に封筒を差し出すお母さん。

愛子「茶封筒でラブレターよこす人なんていないでしょ！全然違うじゃない。真面目な手紙だよ」

お母さん「じゃあ、その手紙は真面目な裁判官の方から？」

愛子「(やれやれ、わたしはこの母親から生まれてきたのか...)」

愛子「何これ…『呼出状』？わたし、誰に呼び出されているの？何かしたっけ」
お父さん「愛子よく見なさい。裁判員なんとかって書いてあるぞ」

愛子「ほんとだ。うーん、なんか『裁判員の候補者に選ばれたから、七月〇日に裁判所の〇階に来て』ってことみたい。そういえば、ずいぶん前にも裁判所から手紙が来ていたっけ。今頃になって呼ばれるんだ」

お母さん「でも、裁判官に会えるんだからいいじゃない。しっかり、いい人見つけてくるのよ」

愛子「裁判官ってわたしのタイプじゃないもん」

お父さん「そうだよ。愛子のタイプはお父さんだよな」

お母さん「そして、お父さんのタイプはお母さんね」

愛子「(まったく、うちの両親ときたら...)」

Q 愛子「呼出状って、無理矢理連れていかれるの？」

A いえ、例えば「警察官が家に来て、無理矢理連行される」ということはありません。ただ、呼出状が来たのに、正当な理由もなく裁判所に行かなかった場合には、「二〇万円以下の過料」が科されます。

愛子「サイアク！ 行かなきゃお金取られるんだって」

えっ、わたしが裁判員？